

研究概要報告書【サウンド技術振興部門】

(1/1)

研究テーマ	天吹学習の過程とその文化的意義についての研究	報告書作成者	洲上ラファエル広志
研究従事者			
研究目的	天吹(てんぷく)は、全長約 30 センチメートルで、竹製の管に五つの指孔を有するなど、構造的に尺八と類似する縦笛である。その起源は明らかではないが、古くから薩摩武士の嗜みとして伝承されてきており、現在も鹿児島において受け継がれている、地域の歴史や価値観と深く結びついた郷土楽器である。現在、天吹伝承の拠点となっている共研舎(鹿児島市)では、天吹の保持団体である天吹同好会の定例練習会に加え、薩摩琵琶同好会および野太刀自顕流研修会の稽古も行われており、鹿児島に固有の伝統文化を継承する場となっている。 共研舎は武士の子弟を育成するために行われた薩摩独自の教育制度である郷中教育の思想的基盤を受け継いだ学舎(がくしゃ)の一つである。当時の鹿児島城下では、武士の居住区域を四十ほどに分け、その空間を方限(ほうぎり)とよび、その方限ごとに青少年によって構成された異年齢集団が作られ「郷中」と呼ばれた。各方限には独自の伝統文化や教育が存在し、明治以降、それらの教育は学舎と呼ばれる集団に引き継がれた。この学舎の流れをくむ教育施設が、天吹同好会の練習場所である共研舎である。現在、学舎内ではどのように伝統音楽が受け継がれているか、その現状についての研究は殆どない。 こうした状況を踏まえると、共研舎という独自の伝承環境において、天吹はどのように学習され、その学習を通して何が伝えられ、次世代へと継承されているのだろうか。また、天吹を学習する目的とは何か、その目的と結びつきながら、天吹に固有の音楽性はどのように形成されていくのだろうか。 本研究は、鹿児島に伝承されている天吹の学習過程に焦点を当て、その学習を通して、天吹に固有の音楽文化がどのように伝えられ、継承されていくのかを明らかにすることを目的とする。研究対象は、天吹の伝統を維持・継承している天吹同好会と、その活動の基盤となっている共研舎である。		

研究内容	本研究は、以下の3つの方法により実施した。 1) 資料調査 天吹の伝承者である白尾國利(1920-2006)が遺した研究ノート、録音・映像資料等を収集・整理し、デジタル化を行った。これらの資料をもとに、國利⁽¹⁾の研究過程や方法、特に天吹の学習に用いられる天吹曲の採譜・体系化の過程について検討した。 2) フィールドワーク・インタビュー調査 天吹同好会の活動拠点である共研舎を中心にフィールドワークを実施し、定例練習会、天吹同好会記念会、竹伐り等への参与観察を行った。また、天吹の指導者および学習者へのインタビューを通して、学習過程、天吹に求められる音楽性・精神性などについて調査した。さらに、共研舎で実践されている薩摩琵琶や自願流についても調査を行い、天吹との関係性について考察した。 3) 天吹の継承・推進と研究成果の発信 天吹の文化的価値を広く伝え、その継承・推進につなげるとともに、本研究の成果を社会に発信するため、東京音楽大学において公開講座「現在に蘇る薩摩の土魂(Vol.2)―天吹・薩摩琵琶・野太刀自願流の真髄―」を実施した。天吹・薩摩琵琶の演奏、自願流の演武、伝承者らによる解説を行い、天吹を単独の楽器としてではなく、共研舎や郷中教育を背景とする鹿児島文化との関係から紹介した。また、伝承者・後継者が鹿児島県外で実演する機会を設けることにより、天吹を含む共研舎の伝統文化の認知を広げ、その継承と推進を図った。 フィールドワークの内容は以下の通りに行った。 ■フィールドワーク第1回(2025年11月) 11月14日(金): 共研舎の見学 11月15日(土): 白尾國英・赤崎紳一と竹伐り 11月16日(日): 天吹同好会44周年記念会への参加 ■フィールドワーク第2回(2026年2月) 2月19日(木): 天吹同好会定例練習会への参加(共研舎)、赤崎(天吹同好会副会長)へのインタビュー 2月20日(金): 上川路直光と竹伐り、始良市蒲生町の天吹グループ練習会への参加 2月21日(土): 野太刀自願流研修会、天吹同好会、薩摩琵琶共研舎道場の練習会への参加(共研舎)、國英(天吹同好会会長)、上川路(天吹同好会副会長)、柚木陽(天吹学習者・中学2年生)、柚木ひかる(天吹学習者・中学1年生)へのインタビュー ⁽¹⁾ 白尾國利とその子・白尾國英を区別するため、本稿では両者に言及する際、姓ではなく名を用いる。
------	--

研究のポイント	本研究の成果は4点である。 1) 國利の一次史料の分析から、天吹曲における楽譜の体系化の過程について考察するとともに、その楽譜が現在の天吹学習に果たしている役割について検討した。 2) 天吹独自の学習・伝承形態を明らかにした。 3) 天吹・薩摩琵琶・自顕流の関係から、共研舎における天吹学習の文化的・教育的意義を示した。 4) 天吹の学習が人間形成および地域的アイデンティティと関わることを示すとともに、そこに受け継がれる音楽性・精神性を明らかにした。
研究結果	本研究の結果は、以下の4点に整理する。 ❶ 一次史料の整理・アーカイブ化と分析 國英所蔵の資料のうち、本研究において整理・デジタル化した一次史料を以下に示す。 I) 研究ノート 1) 國利による研究ノート7冊(1955年から2000年まで、年代未詳資料を含む)。 II) 録音資料 1) 「白尾先生 城山共済会館にて 天吹演奏記録」1985年8月6日、カセットテープ、國英所蔵。 2) 「大田天吹 NHK レコード」オープンリール(5号)、國英所蔵。 III) 映像資料(VHS、國英所蔵)。 1) 「天吹同好会活動記録」、1992年11月29日、約44分。 2) 「魂の調べー薩摩天吹の魅力」『ふれあい鹿児島』、KKB 鹿児島放送、鹿児島県提供、放送年未詳[1994年頃と推定]、約14分。 3) 「幻の音を再びー薩摩尺八」『歴史ウオッチング』、放送年月日未詳、約10分。 4) 「薩摩・音の歴史ー土魂の響き『薩摩琵琶・天吹』ー」『日曜の茶の間』、1994年2月6日、約17分。 研究ノートからは、天吹の構造や音階、天吹曲の採譜、鹿児島地方の民謡、天吹と尺八と一節切との比較など、國利による多角的な研究が確認できる。天吹は、師である大田良一(1887-1959)の世代までは楽譜を用いず、主として口頭で伝承されていたが、久保けんお(1921-1991)や國利の世代から採譜が行われるようになった。特に國利は、尺八譜の「ロ・ツ・レ・チ・ハ」の譜字を天吹の音階に対応させ、尺八譜による天吹曲の楽譜を体系化した。その過程についても研究ノートに詳細な記録が残されており、こうして体系化された楽譜は、現在、天吹の学習における重要な教材となっている。 録音資料には、1985年に音楽学者の月溪恒子が國利に行ったインタビューが含まれている。また、大田の演奏を収録したオープンリー

ルは、朗読音声の上書きによって失われたものの、國英が所蔵するカセットテープにダビングされた音源が残されている。

映像資料には、地方テレビ番組における天吹の紹介、國利へのインタビューおよび演奏のほか、1992 年に自主制作された映像が含まれている。後者には、天吹同好会による竹伐り、楽器製作、練習会などの活動が記録されており、当時の天吹同好会の活動実態を知る上で重要な資料となっている。

② 天吹の学習過程と文化的意義に関する分析

指導者および学習者へのインタビュー内容を分析・考察した結果、天吹の学習過程とその文化的意義について、以下の 5 点に整理することができた。

1) 天吹の学習形態

天吹の学習形態は、時代や指導者の考え方に応じて展開してきた。共研舎では、会員を一人ずつ指導し、一つのフレーズを一息で正確に吹けるまで繰り返す個別指導や、師の動作を観察し、身体感覚を通して技術を身につける「見取り稽古」が行われてきた。一方、楽譜だけに依拠せず、現存する古い演奏記録であり、現在も演奏のモデルとされている大田の録音を模範とした学習や、自主的な練習と質問を重視する方法も取り入れられている。現在、天吹同好会の定例練習会(毎週の木曜日 18:00～19:00)では、Zoom も活用され、対面と遠隔的にも参加可能となっている。最初は全員でのロングトーンの練習、次は一人ずつの演奏と助言、再び全員で合奏するという練習形態が定着している。さらに、かつての男性中心の集団から女性を含む新たな会員が参加するようになり、学習環境も形を変えてきた。

2) 天吹の学習内容

天吹学習の中心は、古くから伝承されてきた 7 曲の習得である。現代曲や童謡なども楽器構造から考え、物理的には演奏可能であるが、天吹本来の特徴や音楽性を維持する観点から、基本的に伝承曲以外の音楽は学習・演奏されていない。しかし、2024 年に復元された天吹曲《チゴデレ》は、新たに第 8 曲として伝承されるようになった。演奏の模範については、指導者によって異なる考え方がみられた。楽譜に沿った演奏を基礎とする指導が行われた一方、楽譜だけでは音色や細かなニュアンスを伝えることが難しいため、大田の録音を聴き、その演奏に近づくことを重視する考え方も示された。さらに、天吹の学習には楽器製作も含まれる。竹の選定・伐採から、手孔や歌口を調整して音程や音色を整える過程を通して、楽器の構造や響きを身体的・聴覚的に理解していく。このように、製管に関する知識や技術の習得も、天吹の学習を構成する重要な要素として位置づけられる。

3) 天吹の音楽性と精神性

天吹の音楽性では、音程や楽曲全体の構成だけでなく、音色の美しさと一音一音を大切にし、気持ちを込めて吹くことが重視される。また、天吹同好会では「天吹は人の前で演奏するための楽器ではない」と捉えられ、技術を誇示するよりも、音と向き合い、自らの内面を見つめることが大切にされている。インタビューでも「無心」「心を鎮める」といった表現がみられ、演奏に没頭することで雑念から離れ、精神を落ち着かせる経験が語られた。このように、天吹の学習には、演奏技術の習得だけでなく、演奏を通して自己の内面と向き合う経験も含ま

れている。

4) 共研舎における自顕流・薩摩琵琶との文化的関係性

共研舎における天吹は、自顕流や薩摩琵琶とともに受け継がれ、現在においても三者は相互に関わるものとして捉えられている。インタビューでは、自顕流は一つのことに全身で打ち込み、気合と集中力を養う実践、薩摩琵琶は語りを通して薩摩の歴史や教訓を身体に取り込むものとして捉えられている。一方、天吹には音に集中し、心を鎮める側面があり、自顕流の激しい身体性と天吹の静かな演奏を「動」と「静」の関係として捉える見方もみられた。三者は異なる表現形態と役割を持ちながら、集中すること、身体を通して学ぶこと、薩摩の歴史や精神文化を伝えるという点で共通している。

5) 人間形成と地域アイデンティティ

天吹の伝承には、先人から受け継いだ知識や技術を次世代へ伝えるとともに、天吹・薩摩琵琶・自顕流を人間形成と結びつける考え方がみられる。インタビューでは、「純粋性」「反骨精神」「一途さ」といった精神的価値や、「負けるな、嘘を言うな、弱い者をいじめるな」という郷中教育に由来する倫理観が語られ、それらは薩摩士風との関係から捉えられている。このように、共研舎における天吹の学習は、演奏技術を継承するだけでなく、地域に受け継がれてきた価値観に触れ、それらを身体的な実践を通して理解する場としての側面も有している。

こうした伝承は、共研舎内部の学習活動にとどまらず、地域社会との関わりにも広がっている。天吹同好会は、鹿児島神社六月灯における奉納演奏、東郷平八郎記念式典、薩南学派の南浦文之の慰霊祭、三方隈慰霊祭、墓前での演奏など、鹿児島県内のさまざまな行事に参加している。これらの活動は、天吹を地域の歴史や記憶と結びつける機会となっている。このことから、天吹の伝承は、個人の人間形成に関わるだけでなく、鹿児島との文化的なつながりを確認し、地域アイデンティティの形成・継承に関わる側面も有していると考えられる。

③ 天吹の音楽文化の推進・発信活動について

2026年3月29日、東京音楽大学池袋キャンパス100周年記念ホールにて、2025年度公開講座No.4「現在に蘇る薩摩の士魂(Vol.2)一天吹・薩摩琵琶・野太刀自顕流の真髓一」を開催し、約320名が来場した。主催は東京音楽大学附属民族音楽研究所、企画・司会・出演は渕上ラファエル広志、講師は白尾國英、上川路直光、伊東丞士(3名)、出演者は赤崎紳一、柚木盛吾、柚木陽、柚木ひかる、宇都太賀(5名)であった。一般財団法人共研舎の後援、天吹同好会・薩摩琵琶共研舎道場・野太刀自顕流研修会の協力を得た。講座では、郷中教育と共研舎を背景に、天吹伝承七曲と復元曲《チゴデレ》の吹奏、歴史・製作・学習・伝承に関する解説、薩摩琵琶《城山》の弾奏、自顕流の演武等を行った。2024年のVol.1を継承する企画であり、共研舎の三つの伝統が揃って鹿児島県外で披露された初の機会となった。今後も本シリーズを通して、鹿児島の伝統文化を学術的視点から広く発信していきたい。講座映像はYouTube、配布資料は東京音楽大学学術リポジトリで公開され、講座については読売新聞でも開催に先立って紹介された。

	④ 総合考察：学舎文化としての天吹伝承 本研究では、資料調査、フィールドワーク、インタビュー調査および公開講座の実施を通して、天吹の学習過程とその文化的意義を明らかにした。天吹の伝承は、一部の日本伝統芸能にみられる家元制度とは異なり、先輩から後輩へと受け継がれるものであり、特定の教則本や体系化された練習方法はみられない。そのため、楽譜をどの程度用いるか、大田の演奏をどの程度模範とするかなど、学習・指導方法は、時代や指導者の考え方によって異なっている。また、現在では天吹のみを実践する会員もいるが、本来は自顕流や薩摩琵琶とともに学び、その中で天吹を身につけることが理想とされている。したがって、天吹の学習は単なる演奏技術の習得ではなく、共研舎における身体的・精神的な実践を通して、鹿児島県の歴史や価値観を総合的に受け継ぐ過程として捉えることができる。フィールドワークでは、この三者を身につけることが直ちに「理想的な鹿児島人」を形成するわけではないものの、学舎の教育的文脈においては、天吹・薩摩琵琶・自顕流が、理想とされる人間形成を支える実践として位置づけられていることが示された。
今後の課題	現在まで伝承されている天吹曲には、歌との関係が認められる稚児謡系天吹曲と、歌を伴わない器楽曲がある。天吹は、國利の時代以前には楽譜や唱歌を用いず、師の演奏を聴き、それを模倣することによって身体的に伝承されてきたことが知られている。しかし、そのような伝承形態のなかで、現在伝わる器楽曲がどのように成立し、受け継がれてきたのかについては、いまだ明らかでない点が多い。 天吹の器楽曲に関しては、例えば《シラベ》は尺八の《本調》あるいは《調子》と楽曲構造に類似性がみられる。また、《タカネ》については、月溪恒子が一節切および尺八の《高音》との関連を指摘し、三者の関係について「今後さらに突っ込んだ研究が必要とされる」と述べている(月溪 1981:16)。しかし、こうした天吹の器楽曲と、一節切や尺八に伝承されてきた楽曲との関係について、その後十分な検討がなされてきたとは言い難い。 今後は、《シラベ》《タカネ》をはじめとする天吹の器楽曲に焦点を当て、その旋律および楽曲構造を分析するとともに、一節切や尺八に伝承される楽曲との比較を通して、天吹の器楽曲の成立過程、および一節切・尺八の音楽との関連性を明らかにすることを課題としたい。



写真 1 : 2025 年 6 月 5 日、天吹同好会の定例練習会（上川路提供）。



写真 2 : 2025 年 2 月 21 日、野太刀自顕流研修会。



写真 3 : 2026 年 2 月 21 日、野太刀自顕流研修会。
柚木盛吾から子供への教育指導。



写真 4 : 2026 年 2 月 21 日、野太刀自顕流研修会、
柚木陽。



写真 5 : 2026 年 2 月 21 日、薩摩琵琶共研舎道場。



写真6：2026年3月29日の公開講座の様子。天吹の合同演奏。

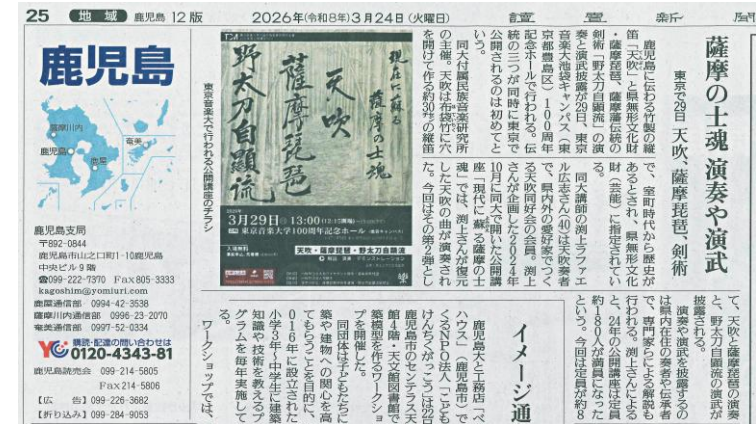


写真7：2026年3月24日付『読売新聞』掲載の公開講座広告。



写真8：2026年3月29日、公開講座「現代に蘇る薩摩の土魂 (Vol.2) — 天吹・薩摩琵琶・野太刀自顕流の真髄 —」の公開映像 (YouTube)。

<https://www.youtube.com/watch?v=QXT7hdR1Ius&t=7144s>



写真9：2026年3月29日、公開講座の配布資料を東京音楽大学図書館リポジトリにて公開。

<https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/2000335>